

埋蔵文化財調査室ニュースレター

HP:<http://www.let.osaka-u.ac.jp/maibun/index-maibun.htm>

第13号 2025年 2 月

大阪大学では、1983年に豊中キャンパスの工事中に弥生時代の集落跡が発見され、法的対応（文化財保護法※への対応）が必要となりました。そして、1985年に埋蔵文化財調査委員会が発足し、埋蔵文化財調査室が調査にあたることとなりました。

大阪大学のキャンパス内には、実は、多くの遺跡が眠っています。普段、大阪大学の学生や教職員、地域の方々が、何気なく歩いている地面の下から、人々が暮らした跡やお墓が見つかっており、地域の歴史を復元する上で貴重な資料となっています。豊中キャンパスは、その全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登載され、2000年近く連綿と集落や墓域として利用されてきたことが判明しています。また、中之島センター造営の折には、江戸時代の久留米藩蔵屋敷の発掘調査を実施しました。吹田キャンパスの地下にも山田丘遺跡の存在が調査によって判明し、現在、その実態を解明中です。

※「文化財保護法」について…1949年の法隆寺金堂火災をきっかけに、総合的に文化財を保護する法律として1950年に制定されました。この中で埋蔵文化財とは、「土地に埋蔵されている文化財」を指し、埋蔵文化財の存在が知られている土地が「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼称されます。

豊中キャンパスは「待兼山遺跡」として周知されています。また、吹田キャンパスでも遺跡が確認され、「山田丘遺跡」として周知されました。2019年、文化財保護法の前身で、本邦記念物保護の最初の取り組みである、「史蹟名勝天然記念物保存法（1919年）」の制定から100年を迎えました。

埋蔵文化財調査室の役割

日本では、遺跡やそこから出土した遺物は、文化財保護法という法律により、国民共有の財産として保存・活用をはかる対象とされています。

しかし、地中に埋まっている遺跡は、ビルの建設や水道管の改修などといった工事によって、常に破壊の危機に直面しています。大阪大学では、キャンパス内の遺跡保護についての法的対応と、建物計画などとの調和を図るために、埋蔵文化財調査委員会を設置し、その委員会の指導のもとで、埋蔵文化財調査室が遺跡の調査やその活用にあたっています。

年間約20件近くにもものぼる工事の立会や発掘調査に加えて、調査成果の展示紹介や、市民講座を日々実施し、キャンパス内の埋蔵文化財の価値について普及啓発活動を進めています。

中でも、近年では5月のいちょう祭での待兼山遺跡の見学ツアーや、11月のまちなね祭での講演会など、多くの方に大阪大学の構内遺跡を知っていただける機会を設けています。そのほか、大学内の遺跡を紹介する動画を作成・公開しています。埋蔵文化財調査室のHPなどから見られますので、ぜひご覧ください。

（木村 理）



キャンパス内における発掘調査の様子



2024年度に実施した遺跡見学ツアー・講演会の案内

■ 大阪大学構内に残る近代遺産

2022年7月に、文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会から『近世・近代の埋蔵文化財保護について』の報告がなされました。その中では、これまで十分に基準の定まっていなかった近世・近代の埋蔵文化財について、今後の取り扱いにかんする一定の指針が提示され、これらが地域の社会や経済活動などの復元に資する重要なものであることが述べられています。このように、近世や近代の埋蔵文化財に対する調査研究の必要性がますます高まってきたといえます。

大阪医科大学や旧制浪速高等学校を前身とする大阪大学でも、当該期の文化財が多く残されています。また、豊中キャンパスの南東部（基礎理学プロジェクト研究センター付近）の発掘調査では、大正時代の日本家屋が1棟みつかるなど、居住空間として利用されていたこともわかってきました。

今後は、こうした近世・近代に属する文化財全般に対して調査研究を行い、大阪大学の成立史や地域社会の近世・近代における社会・経済活動の復元にも取り組んでいきたいと考えています。

近世・近代の埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する基準作成について

（3）埋蔵文化財包蔵地として扱う対象の区分

イ．近代の埋蔵文化財包蔵地の区分の例

ｂ．地域の近代化及び近代史を象徴する遺跡

- ①郡役所、博物館、学校、病院等、近代国家の地域政策や地域の役割、特色を示す遺跡
- ②水道施設、灌漑施設、地域の近代化を知ることができる遺跡
- ③金融機関、邸宅等、地域社会・経済を支えた遺跡
- ④ダム、堤防等、地域社会に大きな影響を及ぼした災害や後の防災事業に係る遺跡

文化庁 2024『近世・近代の埋蔵文化財保護について（報告）』より抜粋（傍線部は追記）



待兼山修学館

1931年に大阪医科大学附属石橋分院として建てられ、その後は医療技術短期大学部本館として使用されました。国の登録有形文化財です。



基礎理学プロジェクト研究センター予定地の発掘調査

2017年には、大正時代の住居がみつかりました。礎石の周囲には三和土がめぐるなど、家屋構造を考えるうえで重要な知見が得られています。



採集された石橋分院の所用食器

「Handai Bunin」と記載されており、大阪医科大学附属石橋分院で使われた食器であったことがわかりました。



基礎理学プロジェクト研究センター予定地で出土した碍子

上の調査では電気配線時に絶縁体として使用される碍子（がいし）もみつき、大正時代の当地に電気がひかれていたこともわかりました。

■「大阪大学埋蔵文化財調査室講演会」を実施しました！

このような、埋蔵文化財に対する幅広い調査研究の成果を多くの方に知っていただくため、2023 年度からは 11 月に埋蔵文化財調査室主催の講演会を開催しています。2023 年度は主に弥生時代から古墳時代、2024 年度は特に近世・近代の待兼山遺跡の焦点をあてて、その意義と価値について分かりやすく解説しました。

本講演会は毎年、50 名を越える幅広い年齢層の方にお越しいただき、大盛況を呈しています。開催方法や時期についてさらに検討を重ねながら、大阪大学キャンパス内に存在する文化財の意義と価値についてさらに分かりやすくお伝えできればと思います。

そのほか、5 月には豊中キャンパス所在の遺跡見学会を実施しています。当日は、豊中キャンパスに存在する古墳や近代遺産をめぐるほか、キャンパス内から出土した遺物を手に取って観察していただきました。遠方では東京都や愛媛県からも来学され、待兼山遺跡の重要性を見るだけでなく、体感していただく良い機会になりました。

2023 年 11 月 4 日（土）

「待兼山から古代がみえる ー阪大キャンパス内遺跡の価値と将来ー」

「待兼山遺跡の概要」上田直弥（埋蔵文化財調査室助教）

「弥生時代の待兼山遺跡」瀬戸田佳男

（埋蔵文化財調査室特任教授）

「ヤマト政権の頃の待兼山遺跡」福永伸哉（人文学研究科教授）

座談会「待兼山遺跡のこれからを考える」

2024 年 11 月 2 日（土）

「待兼山と待兼山遺跡のあゆみ ー弥生時代から現代までー」

「待兼山遺跡の最新調査成果」上田直弥

（広島大学人間社会科学部研究科准教授・元埋蔵文化財調査室助教）

「待兼山遺跡の 40 年」福永伸哉（人文学研究科教授）

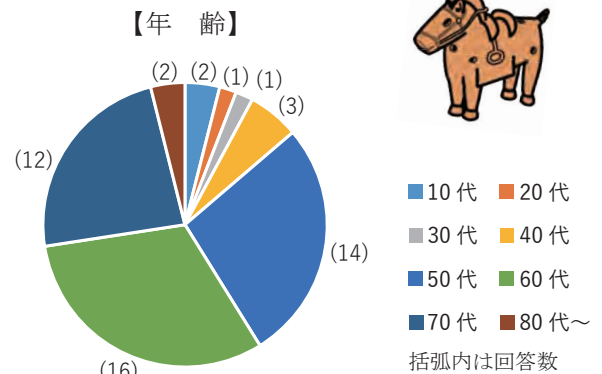
「江戸時代の待兼山」村田路人（大阪大学名誉教授）

「待兼山と近現代遺跡の保護」瀬戸田佳男

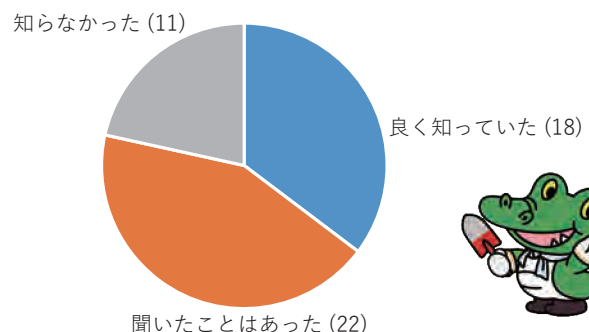
（埋蔵文化財調査室特任教授）

座談会「これからの待兼山・待兼山遺跡を語る」

2023 年・2024 年の講演会プログラム



【豊中キャンパスには遺跡（埋蔵文化財）が存在する】



講演会のアンケート結果抜粋（2023 年）

■ 大学構内における近年の調査等

大阪大学構内では長年にわたって調査を継続してきました。2024年3月現在、豊中キャンパスでの調査は合計295回、吹田キャンパスでの調査は合計115回を数えます。これらの調査では、埋蔵文化財にかんする成果だけでなく、大阪大学の造成以前の地形についての知見も得られつつあります。ここでは、近年における調査のうちのいくつかをご紹介します。



【豊中キャンパス】

共創環境形成拠点新営その他工事に伴う試掘調査

キャンパスの南東部、理学部地点において試掘調査を実施しました。本調査地点は、1980年代の調査時に多くの弥生時代遺物が出土し、待兼山遺跡として周知されるきっかけとなった調査地点のすぐ西側に位置します。

調査の結果、かつての地表面であったと思われる黒色の土層を検出しました。また、黒色土層上では雑木がみつかりました。

この黒色土層の正確な時期は不明ですが、旧地表と考えられ、遺構や遺物が遺存している可能性があります。

【吹田キャンパス】

アグラ2整備事業工事に伴う試掘調査

キャンパスの南東部、生命科学図書館の北側において試掘調査を実施しました。本調査地点は、吹田キャンパスや1970年の大阪万博の造成以前には谷地形であったことがわかっています。

調査の結果、谷は深さ5m以上にもおよび、吹田キャンパス一帯の旧地形がきわめて起伏に富むことが明らかになりました。また、堆積土の観察から、谷の埋め立ては3回ほどに分けて行われていたことも判明しました。

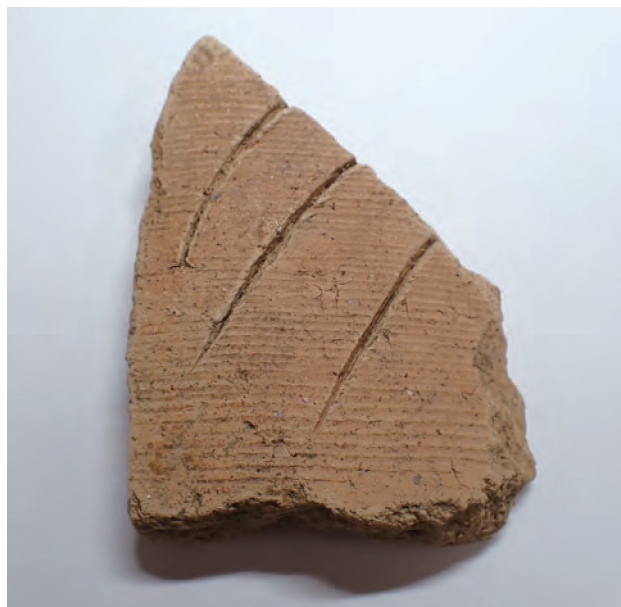


【豊中キャンパス】

待兼山3号墳付近の踏査

埋蔵文化財調査室では、工事に伴う調査だけでなく日頃からキャンパス内各所の踏査を通じて遺跡の現況把握にも務めています。

2023年度に実施した待兼山3号墳周辺での踏査では、円筒埴輪を採集しました。採集した円筒埴輪は外面にヨコハケを行い、3条の沈線からなる記号を有しています。埴輪の特徴から、当古墳は5世紀の中頃（堺市・大仙陵古墳と近い時期）に位置づけられます。



編集・発行：大阪大学埋蔵文化財調査室
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5
電話・FAX 番号：06-6850-5106
HP: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/maibun/index-maibun.htm>

